



ピッポ新聞

2004

4

No.186

子どもの本専門店

年間購読料 (送料込み) 1500円

編集・発行 伊藤俊男

ピッポ

〒424-0886 静岡市清水草薙1-6-3

TEL & FAX 0543-45-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>

Email pippo@diana.dti.ne.jp

大型絵本について考えてみる

先日、この6月にオープンする興津図書館(旧清水市では2館目の図書館)の本の納入作業を3日間やった折りに、超大型の絵本が何冊もあつたことが妙に目に付きましました。勿論、その存在は知っていました。ぼくはこれまで、これを買ったことはありません。その時はただ図書館の「読み聞かせ」用に使うのだな、と思っただけでした。

その数日後、福音館の営業の人が店に来たときに「こんなのがあるのですが」と取り出したのが、「こどものとも劇場全12巻」というチラシでした。そこには「ぐりとぐら」「おおきなかぶ」「はじめてのおつかい」「きよだいなきよだいな」「せんたくかあちゃん」など人気の絵本が12冊並んでいました。そこで目を惹いたのが、「こすずめのぼうけん」を見開きで抱えている男の人の写真でした。その横には「よこ版の絵本は見開きのサイズで1冊、迫力たっぷり・・・」というキャッチコピーがありました。

そこで、ぼくはこの超大型絵本のメリットを考えてみました。

確かに多くの子どもたちに「読み聞かせ」をする時には絵が見やすいし、場合によっては迫力(大きくすることで出る迫力が絵本として必要かどうか?)もでることでしょう。ここまで揚げましたが、ぼくにはこれ以上のメリットが思いつかないのです。それに、そのチラシにも大型絵本の効用として書かれていたのもこんな程度でした。

ぼくは逆にこのチラシを見て、いくつかの疑問が浮かんできました。

最初の疑問は、この絵本を描いた作者は、大型絵本にされることなど全然想定していなかったということ。それが時が経って、大型絵本に作りかえられて出版されたのです。もし、最初から大型の絵本を創るとしたならば、画家によっては全然別の絵になったかもしれない。か、先程メリットとして大きくすれば迫力が出ると書きましたが、場合によっては大きくすれば間が抜けることや、絵が最初に描かれた大きさだからこそ保持していた繊細さや風合いといったものが失われる場合だってあるにちがいないのです。こんな基本的なことを出版した福音館は考えなかつたのでしょうか？

たとえば「スーホーの白い馬」のスーホーが白馬に乗って駆けていく見開きの場面などはモンゴルの大草原の壮大さが伝わってくる場面ですが、これを大きな画面にすればもつと迫力が出るのでしょうか？赤羽さんは今ある大きさの中で、最大限効果や迫力を出す工夫をして表現したからこそ、それがわたしたち読者に伝わってくるのだと思うのですが・・・。

また、ガークの「100まんびきのねこ」の中で、あのおじいさんが野越へ山越へしてネコを探しに行く場面がありますが、あの小さな画面の中でガークが、とてつもなく長い距離を旅するおじいさんを表現するために考え出した新しい手法がある場面を描いたのです。この手法は後にバージニア・リ・バートンへと受け継がれていくのです。

このように、画家は限られた画面の大きさの中で、さまざまな工夫や手法を駆使して絵本を創作しているのです。それを一度にたくさんの子どもが見やすいだろうという安易な考えだけで、後の時代に大きな絵本として勝手に作り変えていいものなのでしょうか。

大型絵本の作者のお考えは？

ぼくは、もし絵本が芸術の一つだとするならば、とても許されることとは思えません。児童文学作品でいえば、完訳本を、翻案として出すようなものです。

ぼくの知っている限りでは、唯一最初から大型の絵本として作られた絵本は片山健さんの『えんそく』（架空社・9975円）だけです。逆にあの絵本を通常の大きさに縮めて出し直したら、どんな絵本になるのでしょうか？作者である片山さんは何と云うのでしょうか？

と、ここまで書いてきて、もつと分かりやすく、ぼくの言いたいことを解つてもらえる方法を思い出しました。

絵本に興味の有る方なら一度は手にしたことのある、あの絵本の宝石といわれる「ピーターラビットの絵本」を例にとって考えてみましょう。

ビアトリックス・ポターの描いた23冊の絵本はどれをとっても、手のひらにのる大きさの小型の絵本です。もしあの絵本をもつと大きな（普通サイズ）の絵本に作りかえたとしたらどうでしょうか。

ぼくは以前それを見たことがあります（ペーパーバックの洋書の絵本）が、その絵は間が抜けていて、ぼくには「ピーターラビット」の魅力が半減していると思えます。さんでした。

さらに、「ピーターラビット」を超大型絵本に仕立てた時のことを考えてみてください。これで読み聞かせをされた子どもは、恐ろしくて夜中にうなされてしまいかもしれませんよね……。

そうそう、「ピーターラビット」の絵本では笑い話のような話があります。とある小学校に図書の見本を持っていったときのこと、図書の先生に「ピーターラビット」の絵本を薦めたところ、その先生に「小さすぎて、管理が大変だから困る」と言われてしまいました。

ぼくは2度とその学校へは本を売りに行きませんでした。

読者から要求があったら、福音館は管理しやすいようにと、普通サイズの「ピーターラビット」を出版して売るのでしようか？ぼくには超大型絵本の発売は質的にはこれと同じことだと思えてなりません。

出版元のご意見は？

そこで質問をしたいと思うのですが、これを描いた作者の人たちは、何故この超大型絵本の出版を承諾したのかということに直接伺ってみたいものです。

勿論、既に亡くなった方の作品もありますが、現役で活躍している作家の作品もあり

りますから……。

それと、中にはこれを拒否した作者もいたに違いないと考えるのですが、この点なども明らかにしなければ面白くないと思うのですが。

それよりももつと聞いてみたいのが、福音館書店の見解です。ぼくの理解では、これまでぼくが書いてきた事柄などを一番大事に絵本作りをしてきたのが福音館だと考えていたのですが（それとも、ぼくの一方的な思い入れだったのかな？）、何故に安易にこの大型絵本を制作販売しているのかを聞いてみたいです。

どうぞご見解を聞かせていただけますか、福音館書店編集部長様。

「読み聞かせ」に本当にいいの？

さて、現在あちらこちらで「読み聞かせ」ボランティアによる「読み聞かせ」が盛んに行われています。この超大型絵本もそんな風潮の中で売れると考えて出版されたのでしょうか、次に、「読み聞かせ」について考えることによつて、超大型絵本のアンチテーゼしたいと思います。

といつても、これは、ぼくの考えというよりも、今は退職しましたが、長い間幼稚園で「読み聞かせ」をやつてきて、絵本研究会なども主宰して、多くのお母さん達に影響を与えてきた方のご意見です。

彼女は「読み聞かせ」というのは、子どもとの関係がとても大切なのだと考えているそうです。

「日常的に子どもと、保育者の信頼関係

が存在するからこそ、「読み聞かせ」をして貰うことが子どもにとって楽しいと思う。子どもは読んで貰っているとき、読んでくれている人の存在(姿)がとても大切だと思ふ。その人の存在(姿が見えるから)を確認できるから、信頼関係がむすばれて、楽しいものになるのだ」と言うのです。「このチラシのように本で体がかくれてしまつと、親近感が薄れてしまつのではないかと」言うのです。

それに、こんな大きな画面だと、どうしても紙芝居のように演技したり、大きな声を出さなければならぬような気になつてしまつのではないか。

大切なのは子どもとの関係

単純に子どもに絵本を読んであげるといふ感じでよいのであって、大げさに「さー、今から読み聞かせをしますよ」て感じになつてしまい、子どもも構えてしまつのではないでしようかとも言っていました。

これをぼくなりに解釈すると、家庭では家族が(当たり前前のことですが)、保育園や幼稚園では保育者が、学校では教師が「読み聞かせ」をするのが自然なことであり、子どもも喜ぶのだと言うことだと思ひます。

分かり易く説明すれば、家庭において、お母さんやお父さんが自分の子どもに「読み聞かせ」をしないで、誰かよその人を呼んできて、「読み聞かせ」をして貰つたら、これほど不自然な事は有りませんよね。で

は何故学校ではそれがまかり通つているのでしょうか？

教室の中では子どもから一番信頼されているのは先生以外にいないと思うのです。

「読み聞かせ」をしてやるのに外から何故人を呼ぶ必要があるのでしょうか。先生自身子どもに「読み聞かせ」をしてやるのが一番自然だし、こどもも喜ぶのです。

閑話休題

「読み聞かせ」はその場所所が一番子どもと信頼関係がある人がやればよいのです。それには、大型の絵本などを使う必要はないのです。

大型の「ぐりとぐら」8400円、傑作集の「ぐりとぐら」7800円です。ぼくなら、大型の絵本を1冊買うよりは傑作集の「ぐりとぐら」を10冊買うか、他の絵本を複数買うけどね。

この大型絵本についてご意見の有る方は是非ピツポ新聞にお寄せ下さい。大型は良いという賛成意見や、大型で「読み聞かせ」をした経験談などを特にお待ちしています。掲載していきたいと思つています。

ねー、この本読んだ？

『ヘンリー いえをたてる』(D・B・ジョンソン・作 今泉吉晴・訳 1260円 福音館書店)

この絵本は前作「ヘンリー フィッチバグへいく」と同じように、アメリカのナチュラリストであり思想家のヘンリー・D・ソ

ローの考えに共感しているD・B・ジョンソンによって描かれたもの。前作は豊かな時間の過ごし方とはどういうことを描いていたが、今回はわたしたちの住む家についてソローがどう考えていたかを物語っている。現代において、とりわけ私たちが日本人は家を建てることがある意味で人生に於ける最大の目的化している感もある。



そんな中で、この絵本は各ページに、小鳥や動物たちの巣作りの様子を背景に描くことによつて、主人公が立てている家のように、もつと簡素な家に住むことで、豊かな暮らしが出来ることを教えてくれる。現代人が見失つた物が見えてくる。

『風の星』(新宮晋・作 1470円 福音館書店)

作者は風の気持ちなつて、風とともに世界を旅する。そんな気持ちの良い絵本です。



風はあつたかな光の中であつたかな、ふわりと飛び始める。どこまでもどこまでも続く水のうえをいく、それはある時は走るヨットの帆を膨らませてヨットともに、

砂漠では風紋を描き、渡り鳥が高い山を越へていくさらにその上から俯瞰する。高く高くやがて宇宙へきえていく……。

『絵本 千の風になって』（新井満・文 佐竹美保・絵 1365円 理論社）

様々な場所で朗読された作者不詳の一つの詩「千の風」を、どんな作者が作ったのか想像し、そこから、一つの物語を紡ぎだした。「千の風になつて」がその物語、これが音楽になり、さらに絵本になつたのが本書である。物語はネイティブアメリカンの一つの種族ナバホの人びとは、



自然を敬いながら生きていたが、ある日白人によって自分たちの土地を追われてしまう。そこで生まれたウパシとレイラは離ればなれになつてしまふが、再び再会し、結婚する。そしてレイラは子どもを残して死んでいく。レイラが夫へ遺したのが「千の風になつて」という一遍の詩だった……。

『月夜の誕生日』（岩瀬成子・文 味戸ケイコ・絵 1365円 金の星社）
万里は誕生日のプレゼントに赤い洋服と

金色のブローチをもらった。うれしくて、服を着たまま寝た。すると、カワウソが窓辺にやってきた万里をまねいた。ついていくと水辺に出、そこで見上げると月が姿を消していた。ツルが伸びてきて、それに乗る。ツルが伸びる度に出てくる動物が、万里にプレゼントをねだる。その度に



万里は自分の持っている物を分け与えていく、最後は自分の名前や住所までも分け与えてしまった。きつと万里はすべてを差し出すことによつて、2度と得ることができない月夜の幻想世界を味わうことができたのだらう……。

『ぼくの見つた戦争 2003年イラク』（高橋邦典・写真・文 1365円 ポプラ社）



報道写真家である著者が、アメリカ軍に従軍して、イラク戦争を米軍の側から撮り、文章を添えて、一冊の本にしました。著者はここでは、自分の感

情をできるだけまじえずに、戦争とはどういふものであるかを伝えようとしています。イラク戦争は米国が終結宣言をしてから、既に1年を過ぎました。だが、イラクはますます治安が悪化しています。既に多くの人びとは、アメリカには戦争の大義など無かつたことを認識していますが、未だに、小泉首相はあの戦争はアメリカが正しいと言いつづけています。自衛隊のイラクからの撤兵も拒否し続けています。自分の政治的立場が、崩壊するのを恐れているのです。こんな小泉政権を支持する人がいることがぼくには信じられません……。

戦争の被害は子どもや老人など弱者に襲いかかる事をこの本は正確に語っています。

今月の宮崎久子さんの「ばあやのおはなしかごは」お休みいたします。次回は5月22日の第四土曜日です。

編集後記

小泉首相にとって一番都合の良い言葉は「反テロ」と「人道復興支援」ではないだろうか。我々はこの言葉を口に出しえすれば、その中身などたいして検証せずにしてしまった。今や、アメリカのイラク戦争は「反テロ」の戦いなどではなく侵略戦争だったことが世界の常識になりつつある。その侵略戦争に憲法を無視し、「人道復興支援」の名の下に自衛隊の派兵を強行したのが小泉首相なのである。ものごとは順序立てて正しく認識する事が大切だ。